

〔特別寄稿〕

カール・バルトと子ども賛美歌

宮田 光雄

カール・バルトは、スイスの生んだ二〇世紀最大のプロテスタント神学者です。彼は、若き日に『ローマ書』の講解によって時代批判の《預言者》として登場し、さらにヒトラーにたいするドイツ教会闘争の金字塔「バルメン宣言」を起草して不屈の抵抗者となり、プロテスタントイズムの「神学大全」とも言われる大著『教会教義学』を世に残しました。

まもなく二〇一八年には、バルト没後、丁度五〇年目になります。私は、自分の生涯を通じて、信仰者としての信仰の面でも、政治思想の研究者としてはナチ・ドイツの研究の面でも、カール・バルトから最も大きな影響を受けてきました。この際、バルト先生の生涯を回顧する読みやすい書物をまとめて、その御恩に応えたいと考え、『カール・バルト―神の愉快なバルチザン』（岩波現代全書）という小伝を出版したところです。

この副題の《神の愉快なバルチザン》というのは、バルトの足跡にたいして名付けられた一つの愛称です。《バルチザン》とは、もともと特定の党派に与するものという意味をもっています。それとともに、現代史においては特

有の機動性や粘り強さをもったゲリラ遊撃兵を指すものです。バルトの生涯は、しぶとく弾力的な政治批判をつづけ、まさに《神のヒューマニズム》に加担する行動を貫き通した歩みでした。

一

バルトの生彩に富む生涯の中でも、最もよく知られているのはヒトラーと闘ったことでしょう。スイスのバーゼル出身のバルトがドイツの大学で教鞭を執るようになるのは、丁度、ナチ・ドイツが台頭する時期と重なっています。すでに当時から学生たちに人気があり、神学部の講義としてはドイツ全国で最も多くの聴講者を集めていました。

ヒトラーが権力を獲得した一九三三年には、バルトは、ボン大学教授になっていました。彼自身は、元来、スイスのデモクラシーを身につけていたので、『わが闘争』を読んで来るべきものを直感し、ナチ党がドイツだけでなくヨーロッパ全体にたいしてもつ危険性を予見できました。

ヒトラー政権は、ヴァイマル憲法の緊急事態条項にもとづいて、ヒンデンブルク大統領による指名にもとづいて成立しました。入閣したナチ党員は、ヒトラーをふくめて三名のみで、保守主義者に囲まれた連立内閣でした。それゆえ、保守党の領袖たちは、自分たちがヒトラーを自由に操れるものと考えていたのです。しかし、それは、とんでもない思い違いでした。ヒトラーは最初の閣議の数時間後に、他の閣僚の反対を抑えて議会を解散し、警察権力を手に入れて総選挙に打って出ます。国家資金と報道機関を自分たちのために全面的に活用できる態勢の下に、議会の絶対多数を占めるための選挙を始めたのです。

その結果、ナチ党は連立与党をふくめて議会の三分の二以上になり、全権委任法Ⅱ「国民と国家の危難を除去する法律」を通すことができました。これは、「ヴァイマル憲法とは異なった法律制定」も可能にする条項をふくみ、ドイツ敗戦の日までナチ支配の基本法となりました。

ひとたび全権を握ると、ナチ政権は、大量のプロパガンダと国家テロによって民衆生活全体を強制的に同質化させ統

制していこうとしました。「ハイル・ヒトラー」の敬礼。強制収容所。野党の解散。労働組合の強制的な再編成など。翌一九三四年八月に高齢の大統領ヒンデンブルクが亡くなると、その「遺言」と詐称して、ヒトラーは首相と大統領職を兼任し、それ以後、《総統》と公称されることになりました。むろん、これらすべての手続きは明白な憲法違反だったわけです。こうして権力の座についてから僅か一年半で独裁制が成立しました。

ナチ政権は、ドイツの教会も一般の民衆生活同様に統制下におこうと意図していました。ドイツの教会は、日本とは違って、大きな組織と長い歴史をもっていましたから、ヒトラーは慎重かつ巧妙に振舞いました。首相になった当初は、教会の自由を保証するとか、キリスト教は国家の柱であるとか、甘い言葉を繰り返します。しばしば聖書的な言葉を散りばめた演説も行ないました。

教会人の中では、ナチ政権が共産主義から教会を守ってくれる最大の味方だと錯覚して、ヒトラーを礼賛する輪が広がっていました。第一次大戦後、敗戦とインフレなど窮乏と絶望に打ちひしがれていた民衆の目には、ヒトラーがドイツを救済してくれる偉大な英雄のように映りました。それを神学的に根拠づけるグループまで出現します。

しかし、バルト自身は、当初から、ナチの宗教政策が、さまざまの偽装のもとに、一步一步、教会弾圧を進めていく手法にすぎないことを見抜いていました。始めのうちは慎重だったヒトラーも、熱狂的な民衆人気が高まるにつれて、自分でもそれに陶酔し、しだいに自分が「運命」によって選ばれた人間ではないかと思ひ込みはじめます。その結果、ついには自分の政策決定の無謬性を主張するようになり、ついには神から遣わされた特別の人間《神の人》ではないかと妄想するにいたるのです。

こうした中で教会闘争が生まれざるをえなくなったのです。ナチ政権は、ドイツ全国民の《強制的同質化》の一環として、ドイツの教会をも党の支配下におき、ユダヤ人教職を教会から追放し、教会をナチ党に倣った国家的組織に改編しようとし始めました。ここに批判的・良心的なキリスト者が立ち上がり、これまでの教会組織から離れて、自由な告白教会に結集し、信仰の自由のため闘う運動を始めます。信仰の危機にたいして特別の信仰告白をつくって闘おうとしたのです。

その間における最初にして最大の成果が一九三四年五月の「バルメン宣言」でした。これは、告白教会の代表者たちが、教派的立場の違いを越えて、全会一致で決議したものです。この信仰告白原案の実質的な起草者はカール・バルトでした。

政治学的に見てとくに重要だと思われるのは、「バルメン宣言」では、国家が神聖な権威をもった絶対的秩序といった存在ではないこと、あくまでも一定の目的、すなわち、法の支配と民衆の平和な生活を守るために、神によって定められた《機能的な秩序》として規定されていることです。国家権威は、一定の目的のために役立つものであり、したがって、その目的に反することがはつきりすれば権威を失うのだということが裏に含まれていました。

国家権力が持っているのは限定的な機能と権限にすぎず、それゆえにまた国民からは限定された信頼と服従しか要求しえないものである。国家秩序はけっして永久不変のものではなく、政策の内容はつねに討論と批判の対象となり、改革と変革の可能性に開かれているのである。ヒトラー自身は、《總統崇拜》を通して、国民が自分のみ無条件で服従することを期待していました。しかし、バルメン宣言は、それを明確に否定したのです。すなわち、「人間に従うよりも神に従うべきである」と。

この間にバルト追放の危険が迫っていました。問題視されたのは二つ。

一つは「ハイル・ヒトラー」という《ドイツ式敬礼》でした。これは、ナチ党の初期に決められたもので、党の指導者にたいして「ヒトラー万歳^{ハイル・ヒトラー}」と挨拶させ、党員の結束と服従とを心理的に強制する方法でした。しかし、ひとたびヒトラー政権が成立すると、しだいに一般の人びとも、これまで街頭で「こんにちは」と言って挨拶していたのを止めて、互いに「ハイル・ヒトラー」と右手を斜め上にあげる挨拶をし始めたのです。

バルトは、そうした要求に安易に同調していく周囲の変化を辛辣な目でみていました。たとえば友人宛の手紙の一節。「《強制的同質化》の分野では、毎日、つぎつぎと大きな素晴らしい奇跡が生じていますが、あまりにも沢山なので、近いうちに私のところのカナリアやカメが、ある朝、小さな足を上げて小さな声で《ハイル！》とドイツ式敬礼をした

としても驚くことはないでしょう」と。

バルト自身は、『ドイツ式敬礼』をしたくなかったし、それを巧妙に拒否しました。講義をするとき、教授が教室に入ってくると、ナチ同調者の学生たちが右手をあげながら、いつせいに起立する。その瞬間に、いつもバルトは、さつと講壇の背後に身を屈め、「照明をつけなければならない」と呟きながら、挨拶を回避してしまう。身を起こすと賛美歌を歌い、聖書を朗読して講義を始める。学長から非難されても、彼は、自分の講義は、聖書のテキストを用いる説教風の礼拝だからいいのだ、と無視していました。

この『ドイツ式敬礼』よりも、いっそう重大視されたのは、ヒトラーにたいする『宣誓拒否』の問題でした。国立大学教授として『総統』ヒトラー個人にたいする『無条件的』な忠誠誓約が要求されたのです。バルトは、学長にたいして、宣誓そのものは行なう用意があること、ただし、「私が福音主義的キリスト者として、それに責任を負いうるかぎり」という言葉を付加した上で行なうことを伝え、さらに文部省にたいして自分の要望を伝えるように依頼しました。しかし、大学当局は、突如、電話連絡によって、宣誓拒否のゆえにバルトの職務停止が即時発効したことを伝えてきました。バルトの講義は中止させられ、講義室は閉鎖されました。

この措置にたいして、バルトは巧妙な法廷闘争を続けます。しかし、最終的には、文部大臣の命令で強制的に退職させられ、スイスに帰国することになりました。ドイツの大学を土曜日に免職された翌週の月曜日には、バルトは、バーゼル大学の教授に就任していたのです。「したがって私は日曜日だけ失業者だった」と、彼はユーモラスに語っています。

二

スイスに帰ったバルトは、ドイツの教会闘争に直接に関わることが少なくなりました。その代わりに、彼は、いつそう精力的に多くの時間を執筆にあて、論文やエッセイ、講演などを通して、ナチズムにたいする精神的抵抗を基礎づけ

ようと努めます。一九三八年夏に第二次大戦が始まると、ナチ・ドイツの侵略に脅かされたり、占領下におかれた国々に向けて多くの公開書簡を書き送って激励しています。一例としてイギリスへの手紙（二九四一年四月）。大戦の勝敗については、まだ決定的な予測のできない頃のことでした。

バルトは、この手紙の最後に、バーゼルから僅か数キロメートル先にはすでにドイツ国境があり、「私たち自身にたいする脅威もまた、なおまったく別の形をとること（すなわち、ドイツ軍の侵略の危険）もありうる」と記しています。しかし、彼は、連合国側の勝利を確信し、事態全体の「最終的結末」については何ら疑いも持っていない、と断言するのです。

「私たちすべての者の国籍は、いかなる事情の下でも、天にあります。それ故にこそ、私たちは、今日、かくも焦眉の問題である地上的・政治的秩序の危機に対しても、快活な勇気を抱き、揺らぐことのない決意をもちつづけることを許されているのです」。

《力強く、落ち着いて、ユーモアをもって》——バルトの闘いの基本的姿勢は一貫していることがわかります。この手紙の中で、バルトも、たしかに、当時の人びとが口にしたように「ヒトラーの魔性^{デモニア}」という言葉を用いています。しかし、それは、彼自身がヒトラーをデーモンと考えて恐れていたのではないのです。「ヒトラーのあの企ては、その小狡さと活発な動きの中で、騒がしい物音と火花を伴いながら、悪戯好きの小さな妖精^{コーボルト}が企てているようなものにすぎない」。バルトは、ヒトラーの狂暴な侵略政策に対しても怯えることなく、それを笑いとばしていたのです。

ドイツ敗戦後、バルトは、ドイツの人びとを糾弾するのではなく、むしろ、過ちを犯してどん底に落ちたドイツに対して理解ある友人として発言します。ドイツが「健康」を取り戻し、再建する道を見いだすように、激励と助言とを惜しみませんでした。

ドイツ人は「少しばかりイギリスやスイスの模範にならって」《日常的政治》を見つけるべきである。「他の人と共に一つテーブルにつき、互いに語りあう」こと、「耳を傾け合い、一歩前進するために、有益で、さっぱりした妥協を

見出だすことができれば、何と素晴らしいことか」。冷静な思考と責任ある行動とを共にすることのできる真に《成人した国民》にならない、と訴えたのです。

バルトは、すでに戦争の終わった一九四五年夏、いち早くドイツを訪問して、教会闘争を担った友人や関係者と再会しました。こうした折に、ドイツの少壮の神学者が――曰くありげな目配せをしながら――語りかけてくるのを耳にしました。「われわれは第三帝国（＝ナチ・ドイツ）の時代にデーモンの目を直視したのです」と。このいかにも深刻そうな口ぶりに対して、バルトは、すかさず簡潔直截に、こう返答しました。「そのことは、しかし、デーモンには何らの感銘もあたえなかったようですね」。

バルトは、こう反問せざるをえなかったのです。「なぜ、デーモンについてだけ口にするのですか。なぜ、具体的に、われわれは政治的には愚かだった、と言わないのですか」と。ドイツ国民は一九三三年にヒトラーの下に屈従したとき「誤った道」を歩んだということ、そしてドイツの教会も「誤った発言や誤った沈黙によつて、この誤りに対して共同の責任があるということ」を承認し、明確な声明を出すべきだ、と。

こうしたバルトの働きかけもあつて、一九四五年一〇月、ドイツの福音主義教会の代表者たちは、世界の教会に向かつて《シュトゥットガルト罪責告白》を公にしました。ヒトラー体制の成立にたいしてドイツの国民と共に教会もまた連帯して責任をとらなければならないという歴史的に有名な宣言です。

こうした醒めた目で事態を正しく見ようとするバルトの態度は、東西冷戦の時代にも変わることなく貫かれています。互いに軍備拡大を続けて敵対し合うのを止め、平和的に共存すべきことを訴えたのです。このバルトの見通しが正しかったことは、一九八〇年代末に明らかにになりました。東の世界の国々で民主化が始まり、ついに東西の冷戦に終わりが告げられたのです。当時、バルトは、東西世界両側で押し進められつづけた核武装にも断固とした反対を公表しています。その際、彼は、原子核利用をめぐる「人間の罪」という言葉も用いていました。今日的視点からすれば、このバルトの批判は、すでに《原発》反対にも通じていると言つてよいものです。

三

こうしたバルトの毅然たる姿勢と先見的な洞察を可能にしたものは何だったのか。この疑問は、大いに関心をそそられるところでしょう。

バルトが神学者として世に認められたのは、若き日のデビュー作『ローマ書』の講解によるものです。その出発点にある基調は、「神の《神たること》」、すなわち、人間にたいする「神の固有の存在と主権」を断乎として主張し、さらに人間的な体験から出た信仰や文化理想をふくめ、あらゆる「被造物（＝神によって創造された万物）の神格化」を明確に否定することでした。バルトの極めて印象的な表現を用いるなら、人間のすべての行動の前には「神のマイナス」という括弧」がつけられているというのです。それは、人間中心の近代文明を謳歌し賛美する時代全体に対して痛烈な批判と警告を発するものでした。

そこから何が出てくるのか。「神のマイナスの括弧」によって、人間のすべての自己主張はイデオロギー的絶対化を停止させられる。そのとき、人間は、いつさいの激情を失い、互いに角突き合わせて衝突することをしなくなる。反対に、「神の言葉」が真剣に聞かれるところで、初めて自己絶対化や偶像崇拜から解放され、初めて人間は冷静さを取り戻す。物事を真にリアルに見つめることができるようになる。「誠実な人間性と世俗性」が生まれ、人間は「即事的」になる。

バルトによれば、こうして初めて天と地のあいだに「自由な活動の空間」が生まれるのだ、という。すなわち、そこでは、対立する双方の主張から絶対的な語調が消えて、比較的穏やかな態度で、絶対的ではなく相対的に、人間にとって善なるさまざまな可能性に道が開かれるようになる。その時、初めて「政治が可能となるのだ」！

こうした考え方は、「バルメン宣言」でも同じです。そこでは、たとえば、「国家とは異なった、国家より偉大なものが存在すること。それは、約束された神の支配であり、これに較べて、地上の国家は、精々のところ暫定的・過渡的な存在にすぎないこと」が宣言されていました。神の国への希望にもとづいて、逆に、地上的な課題＝国家や政治の問題

に対して冷静に取り組み、ナチ・ドイツの教会統制を批判する自由も出てくる。すなわち「人間に従うよりも、神に従うべきである」という信仰的決断のリアリズムが可能となるのです。

バルトの神学を集大成した『教会教義学』は、単に神学的な教理やドグマを扱った本ではありません。同時代の出来事と周到に対話しながら神学の根本問題まで考え抜いた《徹頭徹尾、政治的な本》だ、と言われています。その一例。「神がひとりであり、何ものも神に等しいものはない、という命題にまさって危険な革命的なものはない。神は一人であるという命題の真理に出会って、ヒトラーの第三帝国は挫折するであろう」。バルトがこの文章を書いたのは、ヒトラーがその最精鋭の軍勢力を整えてヨーロッパに対する侵略戦争の牙をむき出しにした時点でした。バルト神学に批判的な評論家も、「ここにおいて神学者バルトは預言者になった」と言い、さらに「彼の預言は、われわれの眼前において実現された」と最大の賛辞を書き加えています。

『ローマ書』では、バルトは「神は神である」ことを徹底的に強調して、神と人間との「質的な相違」ということに力点を置いていました。しかし、その後、晩年のバルトは、人間存在の絶対化・神格化を批判することは止めませんでした。逆に、神が人間に近い存在であるということを強調するようになりました。それが「神の人間性」という後期バルト独特の言い方です。それは、「人間に対して神が関係をもち、身を向けたもうたこと。神が人間の神としてでなければ神であることを欲したまわれないという神の恵み」を意味しています。端的に言えば、「神は、世界のため、人間のための神でありつつ、神である」ということです。これは人間にたいする神の圧倒的な恵みの大きさを示す言葉です。

その場合、とても重要だと思われるのは、この「神の人間性」にもとづいて、「人間とは何者なのか」ということが定義されるということです。バルトによれば、まず「キリスト者は、《神は人間のためにおられる》ということの証人である」。したがって、キリスト者は、「神の人間性」という根源的な事実にもとづいて、徹頭徹尾、ヒューマニストたらざるをえないのです。さらに人間は、その証言を信ずることによって、新しく解放されて生きる存在となるのだ、ということです。

まさに《神が人間のためにおられる》ということの故に、「人間の権利・人間の生命・人間の自由・人間の喜び」などが出てくるということです。あえて言えば、私たち人間の「人間性」は「神の人間性」によってこそ基礎づけられ、可能になるのです。この神の恵みは「信すると否とにかかわらず」妥当する普遍性をもつ、とバルトはくり返しています。神の恵みの下に立つことによって、初めて人間は人間らしく生きることを許されるのです！

『教会教義学』の中で、神の支配と摂理を論じて、バルトは「神が治めていたもう」という恵みの支配こそ、「世の出来事」についてキリスト教的に思考する場合の「最初の決定的な第一歩」であると断言しています。それこそが「すべてのことを包む括弧の前につけられたプラスの符号」である、と。若き日のバルトが『ローマ書』において、世の出来事と人間の行動すべての前に置かれた「神的マイナスの符号」を強調していたことを想起するなら、この「神的プラスの括弧」という新しい大胆すぎる規定には、アツと驚かざるをえないでしょう。

四

バルトは、バーゼル大学引退後まもなく、数週間にわたるアメリカの旅をしました。各地で大歓迎を受けた旅の一齣。シカゴ大学のチャペルで講演して、聴衆からの質問を受けます。すると一人の学生が立ち上がり、バルトのライフワークを短い言葉で要約できないか、と質問したのです。バルトの『教会教義学』は、刊行されているものだけでも全一三冊、一万頁に及ぶものです。聴衆は、この学生の大胆さに息をのみます。しかし、バルトは、少しも困った顔を見せないで、答えました。「よろしい、私が母の膝下で教わったことのある一つの歌の言葉で答えましょう」と。つづけて彼の口から出たのは、世界中でよく知られた子ども賛美歌「主われを愛す。主は強ければ・・・」(‘Jesus loves me, this I know, for the Bible tells me so’)の一句だったといふ。

実は、この面白い話は本当にあった出来事だったかどうか、一般的には知られていない事実のようでした。私の調べたところでも、海外のバルト研究者の中には、それを確認するために、インターネットを使って目撃証人を探している

人もいましたから。その研究者自身、これは《聖人伝説》ではないかと、半信半疑のように見受けられました。しかし、この「逸話」は、まことによく出来ていて、心引かれるものがあると感じていました。それは、バルト神学の本質を正しく示しているからです。すでに引いた《摂理》について論じた箇所の冒頭には、こう記されていました。

「信じると言うことは、福音書の意味では、疑いもなく、徹頭徹尾、まったくの子どもらしさと直接性の中で、神の摂理を堅く保持して手放すことなく、神の摂理を喜び、神の摂理に従うことを意味している」と。神学者バルトの生涯を支えていたのは、聖書のメッセージ、すなわち、イエス・キリストの福音に対する「子どものような」素直な信頼、だったので。

この「主われを愛す」に関するバルトの話を、私は、冒頭に記した小著『カール・バルト』の「まえがき」で紹介しておきました。ところで、この本を読んだ読者から頂いた多くの手紙の中に、とても嬉しい情報が伝えられてきたのです。それは、私と同年の関田寛雄牧師から二度にわたって送られてきたお便りでした。

「これは本当にあった話です。その場に私自身がいたのです」と書かれていて、大変驚かされました。この日、関田さんが留学していたマツコーミック神学校から四台のバスで大勢の学生たちがシカゴ大学に押しかけてきていたのです。その学生の質問に答えて、バルトが自分の神学は「主われを愛す」に尽きます、と断言した時に、学生たちのあいだから「どっと歓声と共に熱い拍手が起ったのを、今も、よく記憶しています」と。

じつさい、生涯を通してバルト自身は、イエス・キリストへの集中ということを眼目として神学を進めてきました。したがってまた、自分の神学によってバルト学派をつくることなど少しも望んではいませんでした。彼は、自分は《バルティアン》《バルト主義者》ではない、と口にすることを常としていたのです。

戦後間もない頃、神学生たちのあいだで《バルト主義者》を自称するグループが出来始めていました。バルトの《膨大な》著作を読破したかどうかが議論され、崇拜者の中には、バルトの著作が聖書よりも重要だ、と明言する者さえ現われたという。この学期の講義が終わった時、バルトは終講の辞でこう述べました。

「私は、バルト主義者という人たちが存在しているということを耳にしました。諸君がそんな人に出会ったら、よろ

しく言うておいて下さい。そして私がけつしてバルト主義者ではないということも伝えておいてくれたまえ」と。

以上の話と結びつけて、最後に、「日本の友へ」宛てたバルトの手紙から引用して終わりとしましょう。

「どうか私の名「カール・バルト」を担ぎ上げないで頂きたい。それは、この世では興味ある名前は、ただ一つある「すなわち、イエス・キリスト」だけだから」と。「私の本から、あなた方がイエス・キリストに導かれる時にこそ、あなた方は、私を正しく理解したことになるのです」。この手紙は、さらにこう続けられています。

「良い神学者というものは、いつも自分の家（＝立場）から外に出ます。彼は、いつも途上にあります。彼は、神の遠い山々、神の高い山々、神の無限の海原を、眼前に眺めます。そして、まさにそうすることによって、西や東の世界の人びとを、親しい身近な人間仲間として見出し、彼らのために自分がイエス・キリストの証人として生きることが出来るのです」。

この高きにいます神を仰ぎ見る信頼から生まれる「力強い」生き方。それによって無力感や劣等感から解放され、この世界の中で、自分の存在をかけがえのない一個人として受け入れることのできる「落ち着き」。こうした生き方から初めて、同じ悩みをもつ他者に目をとめ、同じ人間仲間として連帯して生きていく「開かれた心」も持つことができるようになるのです。

バルトによれば、私たちは「他の人を喜ばせようとする時にだけ喜ぶことができる」。だから、喜びもまた、一つの「社会問題」だ、ということです。他人の不幸を喜ぶことからは、明るい喜びが生まれません。むしろ、他の人びとと共に明るく笑い、喜び合えるような人間関係や社会生活を作ることについて、私たちは責任があるのです。

現在、私たちの回りには暗い不安をকাশ出す時代状況が取り囲んでいます。こうした中で、バルトの生涯を貫いた「力強く、落ち着いて、喜びをもって」生きていくという姿勢——この「晴朗な精神」をもつことこそ、いま、私たちがバルトから学ぶべき最も重要な事柄ではないでしょうか。どんなに困難が多くても、新しい未来の可能性に向かって希望と勇気をもって生きていこう。

日本の民主主義を本当の民主主義にするために、一人ひとりが、いま与えられている持ち場に踏みとどまり、なお残されている自由な選択のチャンスを生かしながら、この課題に積極的に取り組んでいこう。さまざまの政治参加を通じて――批判的川柳の新聞投書から、街頭での市民的な抗議の行動、少なくとも次の選挙で主権者として一票を投ずる行為にいたるまで。この障碍多き日本社会において、《未完のデモクラシー》を根付かせる努力を続けることは、長い時間のかかる、大きな忍耐をとまなう困難な課題です。それ故にこそ、「心のゆとり」を失ってはならないのです。バルトの信仰と生涯が示してくれたように、「笑いとユーモア」を忘れないで！ なぜなら、あの子ども賛美歌にある「われ弱くても恐れはあらず！」(He is strong) という根源的な神信賴の根拠が失われることは決してないからです。